

## 保育の場における「気になる」子どもの保育支援に関する研究2 ——「気になる」子どもの行動チェックリストと行動観察との関連——

本郷一夫・杉村僚子・飯島典子・平川昌宏・太田久美子・高橋千枝\*

東北大学大学院教育学研究科・\*青森中央短期大学

本研究は、保育の場における「気になる」子どもの保育支援に関する一連の研究の一部である。本稿では、チェックリストと行動観察との関連について検討を行った。具体的には、保育者との関係、他児との関係、集団場面での様子などの5つの領域と「対人的トラブル」、「落ち着きのなさ」、「ルール違反」などの5つの因子から構成された「気になる」子どもの行動チェックリスト(D-1様式)を作成し、保育者に対して5段階で評定するように求めた。また、保育所の「朝のお集まり場面」「ルール遊び場面」「自由遊び場面」の3つの場面における他児や保育者とのかかわりについて観察を行い、否定的行動、身体接触、逸脱行動といった行動に着目し、分析を行った。その結果から、保育者は単に対象児の否定的行動の頻度の高さに着目しているわけではなく、それが他児との関係のなかでトラブルなどに発展する場合に「気になる」と感じるということが示唆された。

キーワード： 「気になる」子ども 保育支援 チェックリスト 行動観察

### 問題と目的

近年、知的側面については顕著な遅れは認められないにもかかわらず、「落ち着きがない」「感情をうまくコントロールできない」「他児とトラブルが多い」などの特徴をもつ、いわゆる「気になる」子どもに対する保育をどのように進めていけばよいかということが大きな問題となってきた(本郷ら, 2003; 2005)。そのような現状をふまえ、2004年5月より、仙台市健康福祉局子ども家庭部保育課、仙台市の公立保育所15ヶ所(各区3保育所)と協力して、東北大学大学院教育学研究科本郷研究室では、「保育の場における『気になる』子どもの保育支援に関する研究プロジェクト」を開始した。このプロジェクトは、第1に「気になる」子どもや子どもを取り巻く「環境」を保育者自身が理解することを支援する方法を検討する、第2に保育者への支援を通して、「気になる」子どもと子どもを取り巻く人々を支援する方法を検討する、という2つの目的のもと進められてきた(本郷, 2006)。具体的には、「気になる」子どもの行動やクラス集団に関するチェックリストなどを作成、実施するとともに、あわせて保育場面における子どもの行動観察を行ってきた。

これまでの研究(本郷, 2006)では、「気になる」子どもの行動チェックリスト(D-1様式)の1年間の変化の特徴として、2歳児では保育者の「気になる」程度が増加するのに対して、3歳以上児では逆に「気になる」程度が減少するという結果が報告されている。このことは、2歳から3歳にかけて飛躍的に向上する言語・コミュニケーション能力によ

って、2歳児ではむしろ「気になる」特徴が顕著になり、保育者の「気になる」程度が増加するが、3歳以上児では、さまざまな保育の改善が効果的に働き、子どもの行動が変化し、保育者の「気になる」程度が減少したと対応すると考えられる。しかしながら、実際には、保育者の認識と子どもの行動との関係はより複雑な様相を呈していると考えられる。

そこで、本研究では、「気になる」特徴が顕著な子どもとして、プロジェクト当初の「気になる」子どもの行動チェックリスト（D-1様式）の得点が高い子どもを各年齢5名ずつ計20名抽出し、「気になる」子どもの行動チェックリスト（D-1様式）と行動観察の結果との関連を検討することによって、保育者の認識の変化と子どもの行動との関係を明らかにすることを目的とする。

## 方 法

### 1. 対象児

仙台市の15の公立保育所から「気になる」子どもとして報告された60名のうち、2歳から5歳までの各年齢別に「気になる」子どもの行動チェックリスト（D-1様式）のI期の得点が高い子どもを5名ずつ計20名抽出した（すべて男児）。

### 2. 調査期間

平成16年5月から平成17年3月。調査期間は、I期（5月～7月）、II期（10月～11月）、III期（2月～3月）に分けられ、3回の調査が行われた。このうち、今回は、I期とIII期の結果について報告する。

### 3. 調査方法

#### (1) 「気になる」子どもの行動チェックリスト（D-1様式）

「気になる」子どもの行動チェックリスト（D-1様式）は、「気になる」子どもの実態を包括的に把握するために作成された7つのチェックリストのうちのひとつであり、本郷ら（2003）、ギルバーク（2003）、久野（2003）、井上（2002）、榊原（2002）、小林（2001）、竹田ら（1997）を参考に作成された。「気になる」子どもの行動に関する5領域（各領域12項目）60項目から構成され、保育者は対象児の「気になる」行動について各項目に5段階で評定するよう求められた。集計にあたっては、「保育者との関係で見られる様子」「他児との関係で見られる様子」「集団場面で見られる様子」「生活・遊び場面で見られる様子」「その他の様子」の5つの領域別得点と「対人的トラブル」（7項目）、「落ち着きのなさ」（4項目）、「状況への順応性の低さ」（5項目）、「ルール違反」（2項目）、「その他」（4項目）の因子別得点に分けて算出した。

#### (2) 行動観察

##### 1) 観察手続き

対象児が登所してから昼食前までのおよそ1時間半から2時間観察を行った。観察は、

「朝のお集まり」「ルール遊び」「自由遊び」の3つの場面について行われ、対象児の行動はVTRによって記録された。

## 2) 分析手続き

記録されたVTRから、対象児一人当たり各場面15分、計45分を基準としてデータを抽出した。分析にあたっては、10秒を1フレームとして、「否定的行動」（他児へ・他児から）、「身体接触」（他児と・保育者と）、「身体接触の開始」（他児へ・他児から・保育者へ・保育者から）、「逸脱行動」の頻度をカウントした（表1、表2参照）。この際、同フレーム内では、同じ行動が何回観察されても「1」と記録した。集計にあたっては、1時間当たりの頻度を算出した。

表1 行動カテゴリー（否定的行動・身体接触）

カテゴリー	行動の相手	サブカテゴリー	内容および定義
否定的行動	対象児⇒他児 他児⇒対象児 対象児⇒保育者	抗議・非難	相手の言動に対して反論したり、責めたりする。
		拒否・否定	相手からの要求や質問に対する反応として、否認したり、拒んだりする。
		攻撃	叩く、蹴る、押す、引っ張るなどの身体的攻撃。
		ものを取る	相手の持っているものや使っているものを一方的に奪う。
		その他	上記以外で、否定的行動と考えられる行動。
身体接触	対象児⇔他児 対象児⇔保育者		相手の身体に触れる。肩をポンと叩く、抱きつく、腕や肩を組む、手をつなぐ、抱っこするなど。  ※対象児、他児、保育者のいずれかから開始されたのかについても区別した。

表2 行動カテゴリー（逸脱行動）

カテゴリー	サブカテゴリー	内容および定義
活動内での逸脱 (お集まり場面)	姿勢・身体の動き	寝ころぶ、立ち上がる、椅子に立つ、椅子の背に座る、上半身や頭を前後左右に揺らす、手足をぶらぶらさせるなど。
	移動	自分の定位置から離れる。 (活動に参加しながらの移動)
集団からの逸脱 (お集まり場面・ルール遊び場面)		活動・集団の中心から明らかに離れる。 (活動に参加していても、集団から明らかに外れている場合や、他の活動をしている場合はこれに含む)
場からの逸脱 (お集まり場面・ルール遊び場面)		活動が行われている場所や集団のいる場所から離れる。

## 結果と考察

### 1. チェックリストの結果

図1、図2に「気になる」子どもの行動チェックリスト（D-1様式）の領域別得点と因子別得点を示した。ここから、I期からIII期にかけてすべての領域と因子で得点が減少していたことがわかる。特に、領域別では、「生活・遊び場面で見られる様子」がI期4.13からIII期3.73、「その他」がI期3.36からIII期2.98、因子別では、「状況への順応性の低さ」がI期4.35からIII期4.09、「その他」がI期4.50からIII期4.19と比較的大きな減少が見られた。

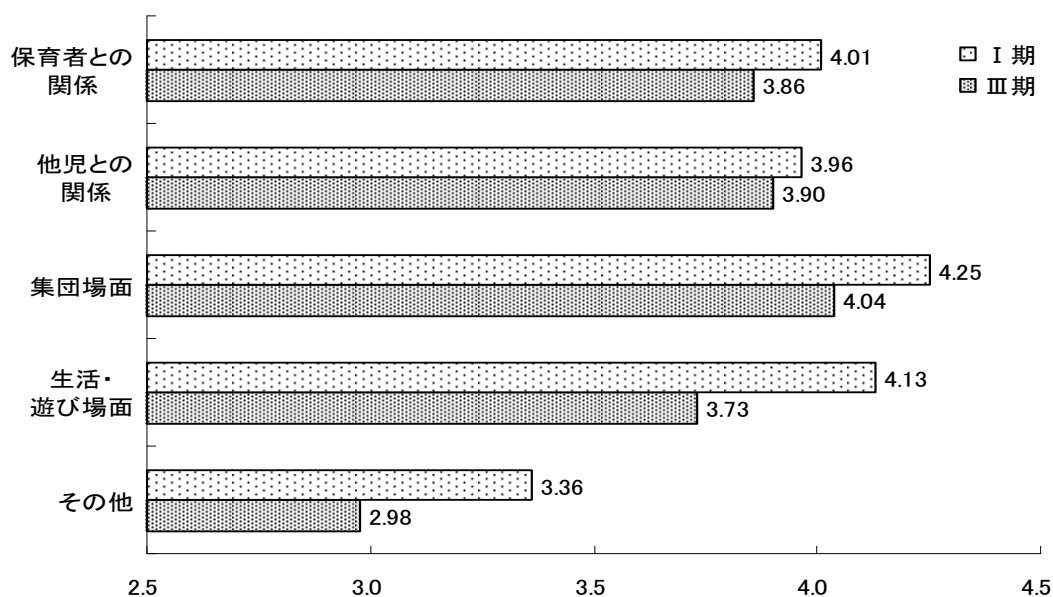


図1 「気になる」子どもの行動チェックリストの領域別得点

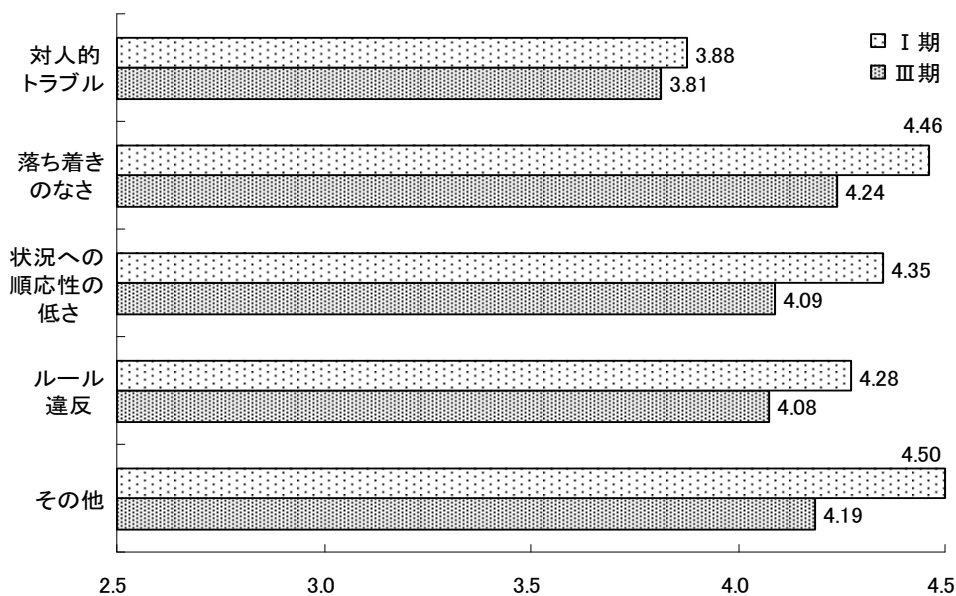


図2 「気になる」子どもの行動チェックリストの因子別得点

## 2. 行動観察の結果

### (1) 行動頻度の変化

「気になる」子どもの行動チェックリスト（D-1 様式）に対する保育者の評定（本郷，2006）では、3 歳以上児では、「ルール違反」を中心に「気になる」程度が減少していたのに対して、2 歳児においては「対人的トラブル」を中心にすべての因子の得点が増加していた。そこで、以下では、2 歳児と 3 歳以上児を分けて集計した結果を示す。

#### 1) 否定的行動

図 3、図 4 に 2 歳児と 3 歳以上児それぞれについての否定的行動の変化を示した。ここから、2 歳児においては、対象児から他児への否定的行動はそれほど増加していないものの（I 期 6.44、III 期 6.72）、他児から対象児への否定的行動が比較的大きく増加していることがわかる（I 期 3.60、III 期 5.68）。一方、3 歳以上児では、他児への否定的行動（I 期 8.92、III 期 12.64）が増加し、他児からの否定的行動（I 期 12.04、III 期 9.64）が減少していた。その中では、「抗議・非難」（I 期 4.28、III 期 4.92）、「拒否・否定」（I 期 0.72、III 期 1.64）、「その他」（I 期 1.36、III 期 3.40）の増加が大きく、「攻撃」（I 期 3.08、III 期 3.08）や「ものを取る」（I 期 0.56、III 期 0.60）の変化は少なかった。

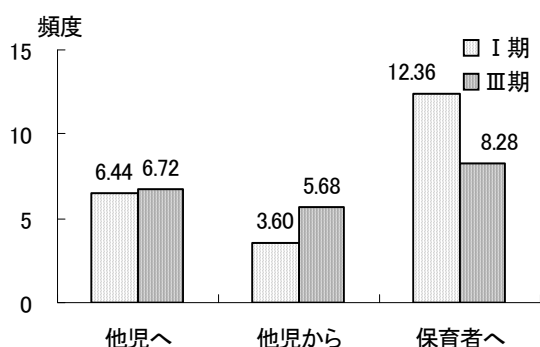


図 3 否定的行動 (2 歳)

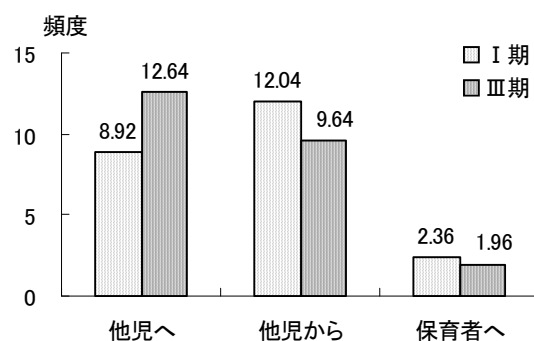


図 4 否定的行動 (3 歳以上)

#### 2) 身体接触

図 5 に身体接触の変化を示した。2 歳児においては、他児との身体接触は I 期 20.92、II 期 16.20、保育者との身体接触は I 期 76.96、III 期 27.48 と時間の経過とともに減少していた。特に、保育者との身体接触では大きな減少が見られた。一方、3 歳以上児においては、他児との身体接触は I 期 20.84、III 期 18.84 と 2 歳児と同様の減少傾向が見られたが、保育者との身体接触は I 期 27.64、III 期 32.36 と増加していた。表 3 には、身体接触が対象児から開始されたのか、それとも他児や保育者から開始されたのかという観点から集計した結果が示されている。ここから、2 歳児においては、他児から開始された身体接触以外はすべて減少していたことがわかる。一方、3 歳以上児においては、対象児から保育者に対して開始された身体接触以外はすべて減少していた。

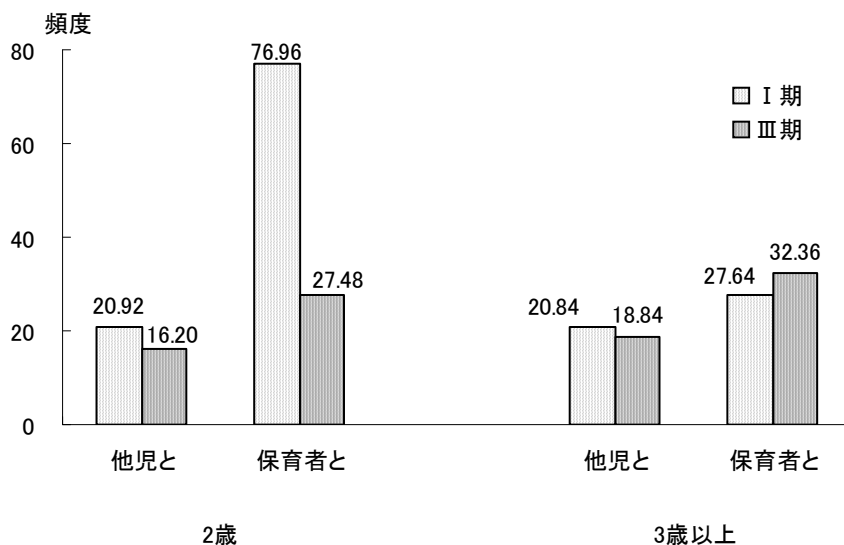


図5 身体接触

表3 身体接触の開始

年齢	時期	他児へ	他児から	保育者へ	保育者から
2歳	I期	12.28	2.40	13.96	9.76
	III期	9.56	3.76	9.44	6.68
3歳以上	I期	10.80	9.20	6.32	7.80
	III期	9.36	5.96	8.20	5.04

### 3) 逸脱行動

図6に逸脱行動の変化を示した。2歳児ではI期48.00、III期48.96と時期を通じて高かった。一方、3歳以上児ではI期25.96、III期17.32と2歳児と比べてかなり少なくなり、加えてI期からIII期にかけて減少していた。

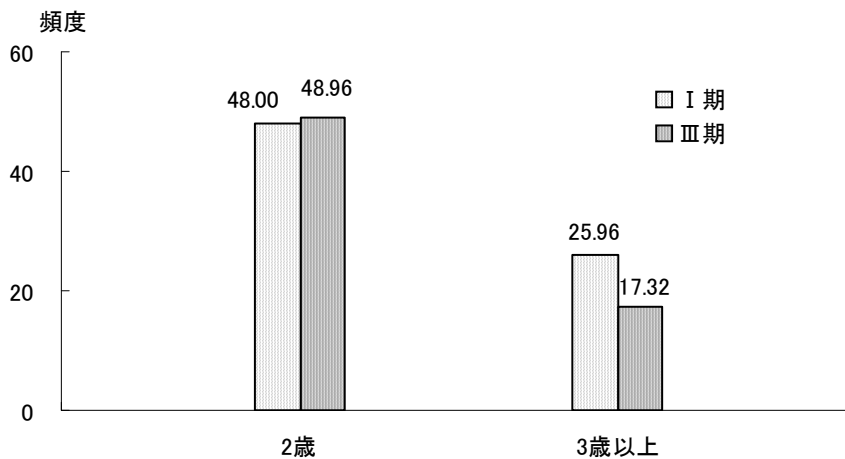


図6 逸脱行動

(2) 行動間の相関

図 7 に行動間の相関を示した。ここから、I 期においても III 期においても、「他児への否定的行動－他児からの否定的行動」の間に相関があることがわかる (I 期.49、III 期.56)。身体接触については、I 期においては「他児への身体接触－他児からの身体接触」(I 期.46、III 期.17)、「他児への身体接触－保育者への身体接触」(I 期.80、III 期-.07) の相関が見られたが、III 期には相関が認められず、身体接触の機能が変化したことがうかがわれる。

これに関連して、逸脱行動に関しては、I 期には、「逸脱行動－他児への身体接触」との間で相関が認められるのに対し、III 期には関連が認められない (I 期.41、III 期-.01)。むしろ、「逸脱行動－保育者への否定的行動」の間に新たに相関が認められるようになることから (I 期.20、III 期.52)、活動や集団からの逸脱行動が保育者との関係で出現する可能性や逸脱行動に対する保育者のかかわりについて検討する必要があると考えられる。

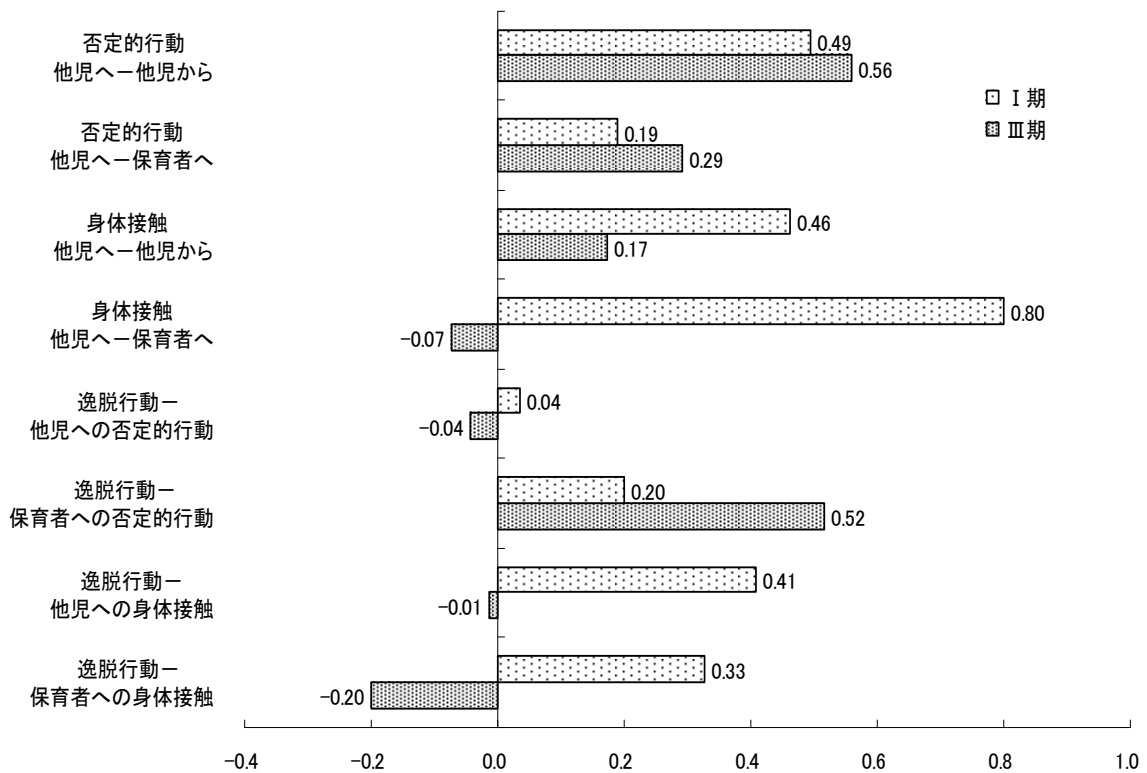


図 7 行動間の相関

3. チェックリストと行動観察との関連

表 4 にチェックリストの得点と行動観察データとの相関を示した。I 期では、他児からの否定的行動と全項目平均得点の相関係数が.49、全因子平均得点との相関係数が.46 と高い相関を示していた。因子別にみても、他児からの否定的行動と「対人的トラブル」の相関係数が.46、「落ち着きのなさ」との相関係数が.51 と有意に高く、他児への否定的行動と「対人的トラブル」との相関も比較的高かった (.42)。一方、III 期では、I 期のよ

うな否定的行動との相関は低くなり、他児への身体接触と「落ち着きのなさ」(.55)、逸脱行動と「状況への順応性の低さ」(.48)との相関が有意に高くなっていた。また、保育者への身体接触と「状況への順応性の低さ」との相関も比較的高かった(.41)。以上の結果から、保育者は単に対象児の否定的行動の頻度の高さに着目しているわけではなく、それが他児との関係のなかでトラブルなどに発展する場合に「気になる」と感じるということが示唆された。

表4 チェックリストの得点と行動観察データとの関連

チェックリストの得点	行動観察データ	否定的行動		身体接触		逸脱行動	
		他児へ	他児から	他児へ	保育者へ		
全項目平均得点	I期	.29	<u>.49</u>	-.04	-.02	-.09	
	III期	.18	.19	.14	.34	.26	
全因子平均得点	I期	.36	<u>.46</u>	-.02	.00	-.12	
	III期	.17	.26	.23	.38	.24	
対人的トラブル	I期	<u>.42</u>	<u>.46</u>	-.11	-.13	.07	
	III期	.26	.20	.11	.34	.08	
因子別得点	落ち着きのなさ	I期	.29	<u>.51</u>	.27	.14	-.12
		III期	.06	.30	<u>.55</u>	.09	.11
	状況への順応性の低さ	I期	.14	.18	-.13	-.07	-.21
		III期	.16	.22	.12	<u>.41</u>	<u>.48</u>
	ルール違反	I期	.24	.38	-.05	.15	-.07
		III期	.22	.30	.06	.43	.33
その他	I期	.28	.24	-.12	-.13	-.17	
	III期	-.04	.08	.14	.25	.06	

※二重下線は相関係数が5%水準で有意な値、下線は相関係数が0.4以上の値

### 総合考察

本研究は、2004年度から開始された「保育の場における『気になる』子どもの保育支援に関する研究プロジェクト」の一部である。そのうち、本研究では、保育者は子どものどのような側面を捉えて「気になる」と感じているのか、あるいは子どもにどのような変化が生じたときに「気にならなくなった」と感じるのかといった点を明らかにするために、保育者の「気になる」傾向が高い2歳～5歳児を対象に、保育者の「気になる」程度と子どもの行動との関連を探ることを目的とした。

その結果、第1に、「気になる」子どもが他児に対して行う否定的行動の頻度よりも、むしろ他児が「気になる」子どもに対して行う否定的行動の頻度に着目して、子どもの行動を「気になる」と感じていることが示唆された。これには2つの解釈が可能であろう。第1に、本研究の結果は、保育者は「気になる」子どもが否定的行動をした時点では、まだ子ども間のトラブルに気づきにくく、「気になる」子どもの否定的行動に対して他児が抗議などをした時に子ども間のトラブルに気づきやすいということを反映している可能



性があるということである。第2には、子ども間での否定的やりとりが多少あったとしても保育者は子どもたちの自主的な解決に任せて保育を続けるが、子ども間のトラブルが高じて子どもたちだけでは解決できない事態、保育者の介入がないと危険だと考えられる事態に対してより重大だと判断する傾向を反映している可能性があるということである。このどちらの解釈が妥当かという点について明らかにするためには、別のアプローチからの研究が必要となるが、保育者からの聞き取りなどを参考に考えれば、おそらくこのどちらの解釈も関連しているのではないかと推定される。

本研究の結果の第2点として、保育支援を始める前の時期であるⅠ期と保育支援を継続していったⅢ期とでは、行動間の関連が異なるということがあげられる。否定的行動については、それほど大きな違いはないが、身体接触が関係するものについてはⅠ期とⅢ期で行動間の相関に大きな違いが認められる。たとえば、Ⅰ期においては「他児への身体接触－他児からの身体接触」「他児への身体接触－保育者への身体接触」の相関が見られた。これは、他児へ身体接触をする子どもは他児からも身体接触をされやすいこと、他児へ身体接触をする子どもは保育者へも身体接触をすることを表している。すなわち、一般に、身体接触を求める子どもは他児に対しても保育者に対しても求める傾向をもつものであり、また行動の返報性という点から身体接触をする子どもは相手からも身体接触を受けやすい、という点でⅠ期の結果は比較的理解しやすい。しかし、Ⅲ期ではこれらの相関が認められなくなる。このことは、身体接触の頻度が単に個人の身体接触を求める傾向を反映したものというよりも対人関係を反映したものへとその機能に変化した可能性を示唆する。同様に、Ⅲ期には「逸脱行動－保育者への否定的行動」の間に新たに相関が認められるようになったことも個人内の「落ち着きのなさ」や「状況への順応性の低さ」というよりも保育者との関係が変化したことと関係している可能性がある。

以上の解釈の妥当性を検証するためには、各チェックリスト間の関連と「気になる」子どもの行動変化、他児の行動変化との関連を分析する必要がある。本研究で示された「気になる」子どもの行動変化は、「気になる」子どもに対する保育者の直接的働きかけよってのみもたらされたものではない。それは、「気になる」子どもに対する働きかけ、クラス集団に対する働きかけ、物的環境の整備、保育体制の整備、保護者支援の結果としてもたらされたものであると考えられる。したがって、上記の解釈の妥当性を検討していく作業を通して、要因間の関連性のあり方を知るだけでなく、「気になる」子どもの保育のあり方や保育支援の方法論についての理解を深めていくことができると考えられる。

文 献

- ギルバーク, C (田中康雄監修, 森田由美訳) 2003 アスペルガー症候群がわかる本: 理解と対応のためのガイドブック. 明石書店.
- 久野節子 2003 広汎性発達障害. 横井・前田・豊永編『児童青年精神医学の現在』, 別冊発達 27, 52-62, ミネルヴァ書房.
- 本郷一夫 2006 保育の場における「気になる」子どもの理解と対応—特別支援教育への接続—. ブレーン出版.
- 本郷一夫・澤江幸則・鈴木智子・小泉嘉子・飯島典子 2003 保育所における「気になる」子どもの行動特徴と保育者の対応に関する調査研究. 発達障害研究, 25, 50-61.
- 本郷一夫・飯島典子・杉村僚子・高橋千枝・平川昌宏 2005 保育の場における「気になる」子どもの保育支援に関する研究. 東北大学大学院教育ネットワーク研究室年報, 5, 15-32.
- 井上とも子 2002 ADHD の子どもの言動の理解と学校対応. 実践障害児教育, 346, 46-49.
- 小林芳文 2001 LD 児・ADHD 児が蘇る身体運動. 大修館書店.
- 榊原洋一 2002 集中できない子どもたち: ADHD なんでも Q&A. 小学館.
- 竹田契一・里見恵子・西岡有香 1997 LD 児の言語、コミュニケーション障害の理解と指導. 日本文化科学社.